5月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　素材生産協同組合　5月10日

毎回 素生協の荷降ろし場がパンク状態である報告は、したくもないが回を増す毎に荷詰まりはひどくなってきている。この日は市日にもかかわらず、とうとう買い方の駐車するスペースが無くなり、事務所の周りは入荷した材でぎっしり囲まれていた。

新井所長によれば「片づけても片づけても入荷してくる。　奥へはいれないから入口付近は、ぎっしりつまってしまう。」との事だった。「土場方の人手不足なのか？」と質問すると「人手不足ではない。市場の運営に支障が有っても今の人数でこなさなければ赤字になってしまうから、人手不足ではない「」という回答であった。しかし、材の入荷に選別能力が追い付けていないのも事実である。

ちなみに今日は、とうとう選別能力がマヒしてしまい、一切選別はできなかったとの事つまり人手不足ではなくて能力不足だと言っている。能力不足は素生協に限った事ではないらしく、秩父のウッディコイケの番頭さんも同意していた。

昭和の終わり頃、つまりバブルが弾ける直前までの中堅技術者がいないという。熟練者は退職してしまい、居たとしてもまもなく定年か、再雇用で、あまりあてにならない。バブルの頃に木材業界に入ってきた人たちは非常に少ない。新井所長によれば「世の中が好景気になればなるほど木材業界は陰る」と言っている　確かに生活物価だけが上がると、木材は下がるというのは先月の報告にも出てきた言葉だ。そんな中で、東京の都市部では大手ハウスメーカーは受注を減らしていないらしい。

話は変わるが、最近のキャンプブームはさらにエスカレートして、グランピングなる物が流行りだしている。高級ホテルのスウィートルームが屋外の水辺などに移っただけの様に見える。主に都会の富裕層の遊びであり、この人たちが、大手のハウスメーカーの需要を担っている訳でも無いだろうが、そんな機運はあるようだ。我々の知らない所では、またバブルが再燃したような、景色が一部でみられる。

もっとも昭和の終わり頃のバブル期にも木材業界は不振であった覚えがある。市の方は、さすがに 2.0m 造材やカラマツはあまりの安さに減っているが、かと言って 3.0m造材に偏りすぎ、太い物まで 3.0m造材が広がっている。これが入って椪は適正な太さの物まで道連れで値が安い。

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　5月17日

　県森連の市も売れ残りが目立つ。　入札結果の発表を聞いてから、改めて土場を廻ってみる。不落札はともかく、無入札の物件を見て廻る。これと言った瑕疵は無く、「なんでこれが売れないの？」と言った物件が、散見される。むしろ曲がり材などの安い物が良く売れている位だ。
空行の多い明細書を見ると、10,000円/㎥以下の行が多く見受けられる買い方の在庫が飽和状態なのに加え、この時期にしては、素生協も県森連も入札物件が多すぎる。「何か注文を受けても、いつでも買える」と言う安心感が、市場の活気をそいでいる。
　もう少し出荷時期にメリハリをつけて、買い方に危機感を持たせないと、ボケた市になってしまっている。年間計画から調整は難しかろうが、工夫の必要ありだろう。せっかく生産した材を、わざわざ市況がぼけた時期に売る事はない。
　そこへもってきて、またも電気代の値上げが発表された。家庭用の電気でも、家計が厳しくなるが、工場は月額300,000～400,000円の負担増になっていると聞く。そんな中でコロナが5類伝染病になり、徐々にコロナは沈静化しつつあるようだが、コロナ融資を受けた企業はこれからが正念場だ。
　コロナ融資は無利子だったが、利子の補給は国が肩代わりする形なので金融機関は、実績を上げて利子補給を受けるべく、押貸ししていた様だ。一定の据え置き期間が過ぎれば、償還しなければならない。しかし、元々先行投資で利益の成長を見込んだ借り入れでは無いから返済は難しい。　言うなれば返す当てのない借金をしてしまっている。
　身軽な企業なら、個人資産は別名義に避難させた上で、倒産してしまえば終わりだが、製材業ではなかなか難しい。この余波が収まらなければコロナは終わらない。コロナに罹患して命を落とすことは無くなるかもしれないが、コロナ融資で消えてゆく企業もあるだろう。今の所製材業者は個人資産などを、これに充て何とかしのいでいる様だが。土木業界は、消えて行く企業も多かろう。との見方もある。